

菩提達摩に関する敦煌写本三種について

田 中 良 昭

目 次

序

第一章 『二入四行論長卷子』の雜録を補う一資料について

第二章 『天竺国菩提達摩禪師論』一卷について

第三章 梁武帝撰とされる『第一祖達摩禪師』について

序

ここにとりあげた三種の敦煌文献は、いずれも昭和四七年夏に、パリ国民図書館の東洋写本部で調査し、筆写してきたものである。そのマイクロフィルムも、第一章で扱ったペリオ本（以下P）四七九五号は、花園大学の柳田聖山教授によ

り、第二章のP二〇三九号は、京都大学の藤枝晃博士により、第三章のP二四六〇号^①は、岡山大学の大淵忍爾博士と花園大学の柳田聖山教授によって、それぞれ撮影将来済のものであり、従って、既に我国で写真によってその内容を窺うことの可能なものばかりである。しかし例えばP二〇三九号の如きは、吐蕃支配期特有の悪い紙質の故かどうかはわからないが、写真ではほとんど読めない部分が数ヶ所もあり、実物に依ることの必要性が痛感されていたものである。勿論龐大な数にのぼる敦煌文献を実物について詳細に検討することは、決して容易なことではなく、短期間に能率的な調査をするには、写本のアウトラインを知るのみで、内容についてはマイクロフィルム撮影による写真でもって、後日の仕事に任ざざるを得ないのが実際であることは云うまでもない。

従って、今回行った私の調査も、本文を筆記し得たものは

決して多くはないが、本小論では、直接間接に禅宗初祖菩提達摩と何らかの関係のあるもの三種を選んで、筆記した本文を紹介し、それに若干の考察を試みたものである。すなわち、第一章で扱ったP四七九五号は、巻首に弟子曇林の略序を有する達摩の唯一の真説とされる『二入四行論』を有する長卷子の尾部に付された諸禅師の語録集、すなわち一般に雑録と呼ばれている部分の欠失部分を補う一資料であり、第二章で扱ったP二〇三九号Vは、『天竺国菩提達摩禅師論』一卷という首題を有する達摩論の一種であり、第三章で扱ったP二四六〇号Vは、梁武帝撰という撰号と、『第一祖達摩禅師』という首題を有する一本である。以下この三種の文献について順次考察していくことにする。

1 P二四六〇号は、表が道教文献、裏が禅宗文献である。大淵博士、柳田教授が撮影将来されたマイクロフィルムは表裏両方であるか、その一方であるかは、未確認である。

2 上山大峻氏は、『瑜伽論手記』や『瑜伽論分門記』等の蕃僧法成による講義録の紙質が、吐蕃期特有の質の悪い厚手の紙であることを指摘されている。(上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究(下)」、『東方学報』京都三九) 一六五頁参照。)

第一章『二入四行論長卷子』の雑録を補う一資料について

一

『二入四行論長卷子』については、古くは鈴木大拙博士の『少室逸書』に始まり、最近では花園大学の柳田聖山教授訳註の『達摩の語録』、『二入四行論』によって、従来伝えられていたテキストが、広く一般に知られるようになった。それらのテキストについては、柳田教授が前記著作中に触れておられるので、⁽¹⁾詳細はそれに譲るが、今それを要約していえば、版本としては、朝鮮梵魚寺で開版された『禅門撮要』中の『菩提達摩四行論』の一本があるのみで、それ以外は悉く敦煌出土の写本である。まず北京国立図書館所蔵の北京本宿九九号と、ロンドン大英博物館所蔵のスタイン本(以下S)二七一五号の二種が、古く昭和九年から一年にかけて鈴木博士によって発見紹介され、この朝鮮の版本と敦煌出土の二本による考究が、長い間続けられてきたのである。

ところが、その後約三〇年たった昭和四〇年になって、いずれも中間部分の断片ながら、このテキストに関する三種の新たな異本のあることを知った私は、それらをまとめて「四行論長卷子と菩提達摩論」と題する小論で報告した。⁽²⁾その三種とは、S三三七五号V、P三〇一八号V、およびP四六三

四号Vである。こうして写本に三種を新たに加えて、版本一種、写本五種の六本のテキストが知られるようになり、それらをふまえて現代語訳と註を付されたのが、前記柳田教授による『達摩の語録』(二入四行論)であって、「禅の語録」シリーズ全二〇巻の冒頭の一巻として、昭和四四年に上梓され、広く一般の目に触れることが可能にされたのである。

ところで、その後更にこの『二入四行論長卷子』の末尾に、尚数種の祖師の語録を記す新たな異本が、竜谷大学の井ノ口泰淳教授の撮影将来になるP二九二三号にあることを発見された柳田教授は、昭和四五年夏に花園大学で開催された日本印度学仏教学会第二一回学術大会で、「北宗禅の一資料」と題して報告され、それを昭和四六年三月発行の『印度学仏教学研究』一九卷二号に発表された³⁾。これは従来知られた前述のすべての敦煌写本が、唯一の版本である『禅門撮要』所収本と大よそ同一系統に属するのに対して、それと異なつたまったく新しい資料であるとして、高く評価されたものである。

たまたま私は、この花園大学での学会に出席できなかったために、柳田教授の発表内容について知る機会を失い、そのために同じ四五年秋に、駒沢大学で開催された曹洞宗宗学研究所主催の第一六回宗学大会に、東洋文庫に収められた井ノ口教授将来の写真により、P二九二三号の本文紹介と若干の考察を兼ね、「四行論長卷子雑録の一異本」と題して報告し、

それを昭和四六年三月発行の『宗学研究』一三号に発表し⁴⁾た。従つてP二九二三号の『二入四行論長卷子』の雑録は、井ノ口教授が将来された写真に基き、柳田教授がその存在を発見して報告されたものであつて、私はその本文を活字にしたに過ぎないのである⁵⁾。

こうして知られたP二九二三号は、従来知られていた『二入四行論長卷子』の雑録の末尾に当る覺禅師の言葉で終ることなく、それに続いて従来まったく知られなかつた梵禅師、道志師、圓寂尼、監禅師、因禅師、三藏法師、忍禅師、可禅師、亮禅師、曇師、慧堯師、知禅師、志禅師という一三人の祖師の言を四三行にわたつて伝えており、しかも最後の志禅師の言葉は、「志禅師曰。一切法皆是仏。」で中断しており、従つてこれで完結するものではなく、更にこれに続く部分の存在を窮わしめる点で特に注目され、その発見が待たれていたのである。

二

前述の如く、昭和四七年夏、パリにてペリオ本の实地調査に従事した私は、P四七九五号にも先のP二九二三号と同一系統の新たな異本の存在を知ることができた。尚これについても昭和四七年八月に、パリ在住の柴田増実氏を通じて新たにペリオ本のマイクロフィルムを入手された柳田教授から、

私の帰国後に、「ダルマ語録にペリオ本四七九五号を加え、『宗鏡録』との重複はこれで全部終り。」という趣旨の御教示をいただいた次第である。長年にわたる柳田教授の学恩に対し、深く謝意を表すると共に、先に従来知られなかった部分のみではあるが、P二九二三号の本文を紹介した私には、更にその後に続くべき部分の一断片であるP四七九五号の本文をも紹介する責務があるかと考えるのである。

尚、この一本は、首尾を欠き、縦二五・五糎、横二一糎（共に最長部分）、一紙一一行の断片に過ぎず、紙は薄い褐黄色紙で油紙の裏打ちがあり、上部は全体にわたり、下部は後半に破損がある。書体はかなり整っており、一行平均二三文字とみられる一断片である。

P四七九五号

〔首欠〕

□法眼。施為拳動皆是菩提。随心直至仏道。莫驚莫□皆□不。

自心□即牙。若能安心處死卓住。不動互即是□。

汝禪師曰。苦諦有故不空。々諦无故不有。二諦二故不一。聖照

□无二。

□禪師曰。一切経論惑人。无罪處見罪。解人罪處即无□。

縁法師曰。一切経論皆是起心法。若起道心即巧為生智余事。若心不起何用坐禪。巧偽不生何勞正念。若不發菩提□求慧解。事理俱盡。

朗禪師曰。心若起時即譬使□。□着不見色。惑起見色作色解。心是色作法々看□。□云。一切法都是妄想計校。作是无有實□。所有□心。道似何物而欲脩之。煩惱似何物而欲断□。□是道器。善知識。

〔尾欠〕

以上示したように、この一本は、不明箇所や欠損部分も多く、決してよい写本とはいえないが、従来まったく知られなかった尾部の一部を之によって多少なりとも補い得たことは、それなりに価値を認めてよいであろう。

ところでこの五人の禪師、法師の言葉の内、永明延寿の『宗鏡録』（九六一）に引用されているのは、最後の朗禪師の語のみである。先にP二九二三号の newly 部分では、五人の祖師の言葉が『宗鏡録』に引用されているのをみたのであるが、新出のP四七九五号によって、更に一人を加え、都合六人の祖師の言葉の引用が明らかになった。すなわち『宗鏡録』卷九七に、

朗禪師云。凡有所見皆自心現。道似何物而欲修之。煩惱似何物而欲断之。

とあるが、この引用の後二句がP四七九五号の「朗禪師曰。」中の言葉と一致する。

またこの朗禪師の前にある「縁法師曰。」の縁法師は、従来知られていた雑録中、『達摩の語録』（二入四行論）におけ

る柳田教授の段落〔五〇〕にみられる「縁法師曰。」の縁法師
と同一人物とみられ、段落〔五五〕における縁法師の答の中
に、

若欲起道、巧偽生。

不発菩提心、不用経論智。⁽⁸⁾

と語っているのが、P四七九五号では、

若起道心、即巧偽生智余事。

若不發菩提、□求慧解。

と語っているのと内容的に極似している点が注目させられ
る。しかしそれ以外の禅師の言葉は、他に比すべきものは見
出せない。

このように新出のP四七九五号は、僅か一一行の破損の多
い断片にすぎないが、前述のP二九二三号と共に『二入四行
論長卷子』の雑録の尾部断欠部分を補う従来と別系統のもの
という点で、貴重な資料ということができよう。

1 柳田聖山訳註『達摩の語録』〔二入四行論〕一五—一七頁参
照。

2 拙稿「四行論長卷子と菩提達摩論」〔『印度学仏教学研究』一
四—一〕二二七—二二〇頁。

3 柳田聖山「北宗禅の一資料」〔『印度学仏教学研究』一九—二
一—二七—二三三頁〕。

4 拙稿「四行論長卷子雑録の一異本」〔『宗学研究』一三〕三五

菩提達摩に関する敦煌写本三種について(田 中)

—四一頁。

5 柳田教授はP二九二三号の雑録中、『宗鏡録』卷九七に引用
されるものとして、梵禅師、圓寂尼の二人を挙げておられる
が、(柳田教授前掲論文二二七頁参照。)更に卷九七に可禅師、
慧堯師、卷一〇〇に三藏法師の言が引用されており、都合五人
となる。(拙稿「四行論長卷子雑録の一異本」〔『宗学研究』一
三〕三九頁参照。)

6 注5参照。

7 『宗鏡録』卷九七〔大正四八・九四一b〕

8 柳田聖山訳註前掲書二〇九頁。

〔追記〕 ロンドン大英博物館には、ジャイルズ・カタログに収録
されない未整理文献約四、三〇〇点(S六九八一号—一二九
七号)があるが、そのS七一五九号に、更に『二入四行論長
卷子』の一異本が発見された。首尾を欠き、29×91.5cm、全三
紙五五行からなるが、第一紙首部の下半分、第三紙の上部をは
じめ、中央部分にほぼ等間隔で九ヶ所の破損があり、紙も赤茶
色に変色していて、保存の状態はあまりよくない。内容は『二
入四行論』を含む最初部で、私の滞英中にそのマイクロファイル
ムが東洋文庫に到着したことを東洋文庫の土肥義和氏から知ら
せていただいた。従ってこれを含めれば、『二入四行論長卷子』
は版本一種、写本八種を数えることになる。

第二章 『天竺国菩提達摩禪師論』 一卷について

一

『達摩禪師論』と題する一本が、奈良薬師寺長老の橋本擬胤師の所蔵になる敦煌出土文献中に存在することは、既に大正大学の関口真大博士によって紹介されている。すなわち関口博士は、従来知られた数種の達摩論に、新出の『達摩禪師論』の一卷を加え、それらを総合的に考察して、昭和三二年に『達摩大師の研究』を上梓されたが、この著作は、博士自身その序言の冒頭に、

本研究は、稀覯の新資料である敦煌出土「達摩禪師論」一卷の解説を中心として、広く禅觀思想史全般の上から、達摩大師の思想の解明を試みたものである。⁽¹⁾

と明記される如く、この新出資料『達摩禪師論』の紹介と考究がその中心テーマとされたものであり、従ってその全文は、巻頭に写真で、巻末の附篇に活字で掲げられており、本篇第二章の第一に、「『達摩禪師論』(敦煌出土)と達摩大師」として、本論の構成と特色、並びに今日唯一の達摩の真説とされている「二入四行」と対比して、詳細な論究がなされている。

その要旨は、この『達摩禪師論』一卷は、首部を欠く六紙

半、一〇五行の卷子であり、一本の帰趣は、第一徐緩、第二唯淨、第三唯善の三種安樂法門であること、そして「開耀元年六月普仁寺主道善受持日宣」の奥書については、筆勢、奥書の位置、文字の大きさ、墨色等の点に若干疑義を挟みつつも、如来藏思想に立脚している点で「二入四行」の理入と、無嗔の教を反覆力説している点で四行の第一報怨行とその趣旨を同じくしており、また全卷にわたり人生処世の実際についての懇切平易な教諭で貫かれ、それが最も簡素に集約されている点で、更には経文引用の様相において、「二入四行」と全く共通していることを挙げられ、これが達摩の真説とすることも可能であることを論述されている。

また一方では、三種安樂法門の第一の「徐緩」が、『楞伽師資記』に四祖道信の守一不移の坐禪看心の法を説く中の「徐徐斂心」の「徐徐」や、『修心要論』に五祖弘忍の守心の坐禪の心要を説く中の「緩緩静心」「緩緩如如」の「緩緩」と符合すること、また『達摩禪師論』の「看心无間」や「守本淨心」の言葉は、そのまま四祖道信や五祖弘忍の思想心要そのものであるところから、『達摩禪師論』が、達摩大師の説法そのままではなく、その仮託であったとしても、それは弘忍時代以後のものではなく、少なくとも神秀、慧能以前のものに属するとみられることで重要な意義を持つとも述べられている。

こうして達摩の禅法との共通点と、四祖五祖の心要との一致点を挙げながら、関口博士は本論一卷の結論として、

この達摩禅師論一卷は、たとえ達摩大師の骨髓を得た門人ではないとしても、親しく達摩大師より聞いて自ら領得したところに随つて達摩大師の言行を記したものであったと見ることもできないようである。然らば曇林の私に記したといわれている二入四行に劣らない重要性を有するかとも思考される。そしてそれは二入四行には欠けているいわゆる「南天竺一乗宗」を明確ならしめるものであり、やがて禅宗四祖道信、五祖弘忍の思想心を展開する禅宗正統の思想をも明瞭ならしめるものであるというべきではあるまいか。(傍点筆者)

と推論されている。

ところで、この推論がはたして正鵠を得たものであるかどうかは、大いに検討を要するところである。すなわち今筆者が付した傍点部分によれば、『達摩禅師論』は、達摩の門人が、達摩大師より直接に聞いて、自ら領得したところに随つて師の言行を記したものであるというが、それを立証する証拠はなく、単なる憶測に過ぎないことである。今一つは、この『達摩禅師論』がオリジナルで、それが後に四祖道信、五祖弘忍の思想心要として展開したということであるが、これも必ずしもそうとばかりはいえないことで、その逆の場合もあり得ることである。

菩提達摩に関する敦煌写本三種について(田中)

すなわち関口博士は、この『達摩禅師論』一卷を達摩の弟子曇林が師の言行を集めて伝えたという『二入四行論』と同一次元においてとらえようとしておられるが、本文中の「頓生浄土」の立場や、その成立が六五〇年をそれ程遡るものではないとされる偽作の『法句経』からの引用が、「法句経云。」としてあることからすれば、これはむしろ達摩と結びつけてみるよりは、関口博士もその密接な関係のあることを述べられた四祖道信、五祖弘忍の思想禅風と同一次元においてとらえなければならぬと考えられる。されば、東北薬科大学の中川孝教授が、「敦煌出土達摩禅師論に就いて」と題する論文において、九点にわたって本文を分析検討され、それを要約して、

本論は思想用語文體上、達摩の二入四行論と一致せず、むしろ四祖及び五祖には全面的に一致する。故に本論は恐らく五祖の門人が四祖並びに五祖の思想を綜合して記述したものと考えられる。と述べられ、また柳田教授が、その著『初期禅宗史書の研究』において、本書に触れ、巻首の開耀元年(六八一)の奥書の筆蹟に疑問のもたれていること、現存断片の冒頭の句が、『大般涅槃経』卷一〇にみえるものの断片であり、それが多くの敦煌資料において、『證心論』や『修心要論』と共に写されている善無畏三蔵の除睡真言に伴われるのが常であることから、本書を、

恐らく東山法門の綱要書の如くである。⁽⁵⁾と結論的に述べておられる点に十分首肯すべき点があると考えられる。

二

以上の通り、関口博士紹介の敦煌本『達摩禅師論』は、首部を欠いた完本ではないが、我国に将来されて橋本凝胤師の所蔵するところとなり、それが内容的に四祖五祖のいわゆる東山法門と密接な関係にあることをみたのであるが、今一つ首題こそ「天竹国菩提達摩禅師論」であるが、尾題が橋本師所蔵本と全く同じ「達摩禅師論」という新たな一本が、パリ国民図書館所蔵のP二〇三九号Vにあることが注目させられる。

このP二〇三九号は、縦二九・五糎、横一五八〇糎⁽⁶⁾の極めて長い卷子本で、紙は比較的厚めの白っぽい淡黄色紙、表は罫入りで最初に「浄土寺蔵経」の印があり、三八紙一二七二行、裏は表の最後に当る第三八紙より第一一紙までの二八紙六五三行からなる。

表は、最初に四行五糎の余白の後、「瑜伽論第卅四分門記 国大徳三蔵法師法成述 談迅福慧」という首題に始まり、以下『瑜伽師地論分門記（本地分菩薩地）』の第四四卷から第五〇卷までが記され、最後は「瑜伽論第五十卷竟 本地分了 談迅福

慧」という尾題で終っている。書体は行書的で、朱で区切りや印がつけられ、細字の註書きも多い。

一方裏は、表の第三八紙に相当する第一紙の最初に四糎の余白があり、以下「天竹国菩提達摩禅師論一卷」の首題に始まる今問題の『天竹国菩提達摩禅師論』一卷が、第三紙の五行まであり、尾題は前述の如く「達摩禅師論一卷」となっている。

続いて第三紙六行から、未審佛先法。佛若在先、佛稟何教。何教成法、先何人説。

答。若論文字法、佛先法後。若論寂滅法、法先佛後。經云。諸佛之師、以為大乘寄世論法也。以法常故、諸佛亦常。稟何教而成道。經云。所説衆生、有師智自然知、任運證寂滅法。於佛轉教衆生、衆生承仏、得成正覺。

として問答体による『大乘寄「起」世論』一卷が第八紙五行まで続き、尾題は「大乘起世論一卷」とあって、首題の「寄」が尾題では「起」とされている。恐らく首題の「寄」は、音通による「起」の誤記であろう。

更に第八紙一六行から第二五紙一二行までの一八紙にわたり、長篇の謔染本『三界唯心无外境論』一卷があり、最後は第二五紙一三行から第二八紙一八行までが『金剛經讚』一卷である。但しこの尾題は「金剛讚一卷」となっている。

この尾題のあと、第二八紙は九糎の余白を残し、それ以下

第二九紙から第三八紙までの一〇紙は、まったくの白紙である。但し、裏の各紙のつぎ目には、「福慧本」「福慧」「談迅」等筆写人の署名があり、特に第三四紙と第三五紙の間には、「談迅福慧二人同一本」という記載がある。

以上この写本の型態について概略述べたのであるが、このP二〇三九号の表にある「大蕃」国大徳三藏法師法成述、談迅福慧随聴本の『瑜伽師地論分門記』については、竜谷大学の上山大峻氏が、蕃僧法成の研究を集成した「大蕃国大徳三藏法師沙門法成の研究」(上)(下)において、他の異本と併せて詳細な論究を試みられ、これを法成が大中九年(八五五)から一三年(八五九)の四年間に沙州竜興寺でなした『瑜伽論』の講義を、談迅、福慧の二人が記録した講義録として位置づけられたものである。

また大正藏経卷八五古逸部二八〇一番には、既にこの『瑜伽師地論分門記』が収蔵されているが、それが依用した原本はかなり複雑で、第一卷より第二〇巻まではP二〇三五号とS二五五二号により、第二一卷より第三四巻まではP二〇五三号により、第三五巻より第三八巻までの四巻を欠いてその後の第三九巻より第四二巻中途まではP二一九〇号と山本悌二郎氏所蔵敦煌本により、第四二巻中途より第四六巻まではP二〇八〇号と山本氏所蔵本により、第四七巻より第五三巻までの七巻は再び之を欠き、続く第五四巻から第五七巻まで

はP二〇九三号によるという具合である。⁽⁸⁾

従つて今問題のP二〇三九号の『瑜伽師地論分門記』は、大正藏経所収の第四四巻から第四六巻までの三巻については、これを比較対照することを可能にし、また第四七巻から第五〇巻までの現在欠文となつてゐる部分については、上山氏の表示の如く、新出のS六六七八号との対照の上で、これを補うことを可能にする貴重なものである。

先に私は、同じく大正藏経卷八五古逸部二七三三番に所収されている唐の道氤集『御注金剛般若波羅蜜經宣演』が、P二一七三号による尾部を欠く巻上と、P二一三二号による巻下の二巻本とされていたものが、新発見のP二一八二号、P二三三〇号によつて尙未完ではあるが巻上の尾部の欠文を大幅に補い得ること、更にP二〇八四号、P二一一三号の出現によつて、従来その存在のまったく知られなかつた巻中を完全に補い、本来上中下三巻からなるものであつたことを報告したのであるが、同じく『瑜伽師地論分門記』の中間二ヶ所の欠文も、近年出現した他の敦煌本によつて補うことが可能になつたことは特筆すべきことであり、他の古逸部諸典籍についても、新資料による対校と欠落部分の補正が可能なものは、それを早急に実施しなければならぬと考へる。⁽¹⁰⁾

ところで前述の通り、P二〇三九号の表は、法成が大中九年(八五五)から四年間にわたつてなした『瑜伽論』の講義録

で、談迅、福慧の二人が聴いて記したものであるというが、その裏の四種の文献も、法成の講義のあった九世紀後半直後からそれ程時を経ずして、書写されたものではないかと考えられる。四種の連写ではあるが、今は当面の問題である最初の『天竺国菩提達摩禪師論』の本文を示し、以下若干の考察をしてみよう。

三

P二〇三九号V

天竺国菩提達摩禪師論一卷

禪門之法、如經論所説、乃有多義、非直一名。一名禪定門、亦名制心門、亦名照心門、亦名覺心門、亦名察心門、亦名正心門、亦名知心門、亦名了心門、亦名達心門、亦名微心門、亦名息心門、亦名安心門、亦名悟心門、亦名住心門、亦名安心門。

何名安心門者、由常看守心故。孰看者境種々相見、一切境界悉知不從外来。迷是自心變作、知境界唯是自心作、此觀自然漸合唯識觀智。唯識者遮詮為義。遮却雜染虛妄之法、詮耶真如仏性者。不去不来、不生不滅、不取不捨、不垢不淨、無為無染、無着自性、清淨湛然、常名為唯識觀智。故言亦名安心門。此出唯識論。

又言住心門者、常看守心故。心即不起無動、故心即安住。維摩經〔云〕。心常安住无導解脱。故言住心門。

言悟心門者、由久看心。不起動、即自心體即与道合。心虚空寂無導為道。故言悟心門。

言定心門者、由常看守心故。於五欲境界、不為乱惑。由看心中不令乱故。維摩經〔云〕。念定惣物。故言定心門。

言息心門者、由常看守心故。息妄縁念、歸真寂定。故言息心門。

言微心門者、由常看守心故。即見心々教法、擧縁妄想却微縁。心虚妄不可得。故云微心門。

言達心門者、由常看守心故。漸達自心本性清淨、不為一切煩惱之垢之所染汚、猶如虚空。故云達心門。

言了心門者、由常看守心。了自己心、无障導虚通迅速。如體常住不動、畢竟寂滅即涅槃相。故云了心門。

言知心門者、由常看守心故。知去来、知心生時、知心滅時、復常知。過去心已滅不可得、未來心未至不可得、現在心無住不可得。

由常看守心故。知心去来生滅悉常善。故云知心門。

言正心門者、由常看守心故。不令妄輒、生正念不移。故云正心門。

言察心門者、由常看守心之故。察煩惱賊、六根之中六箇頭首大賊。六賊者、眼愛美色、耳貪好聲、鼻貪美香、舌貪美味、身貪滑

觸、意内貪塵、弊聲香味觸也。若貪着生愛、即為所燒。是故智者察六塵賊、不令得入。譬如開令守門、端坐專察。門中有人来去、

悉須察慮、不得一人輒盗来去。察心亦示、所言察者即是覺察之義。覺察心口、善惡等念悉無有偏。若有善即随生有滅。有惡念惣

守覺察。控制斷除、常自察慮身心過失。故云察心門。

言覺心門者、由常看守心故。即覺自心體性真如。无色无形、非常非断、非内非外、亦非中間。離諸色相、不出不没、不来不去、不生

不滅、非垢非淨、亦非方圓大小長短、離有離無、畢竟空寂。此是

自家真如、本性清淨心、不可得以言說分別顯示。維摩經云。如自觀
身實相、觀仏亦然。心亦前際不來、後際不去、今則不住。与仏同
體、与法相応、身體無為、即合僧義。即是仏寶。覺照見心中三
寶、復覺道在身中。若心内覺不覓道、若着相外求、累劫弥遠、去
道将遙。華嚴經云。自歸依仏、自歸依法僧、此是心中一體三寶。維
摩經云。若自觀者名為正觀。若他觀者名為邪觀。自觀身心得定解
脱道。故名正觀。耶觀者謂、身心之外別取境界惑見。諸仏菩薩、青
黃赤白光明等事、並是相心妄見与道違。故名邪觀。又言覺心者、
是覺悟之覺、々悟自心即是真仏。無量壽觀經云。是心是仏。念仏
三昧經云。只是念心求心、只是求仏。所以者何。心識無體相。維
摩經云。煩惱即是菩提。謂覺煩惱性空無有處所、名為菩提。謂覺
煩惱性空無所有處、名為菩提。故名覺心門。

言照心門者、恵日明朗照自心。豈不以日月所照為明。觀音經云。
恵日破諸闇。故云照心門。

言制心門者、為身生成飯之事皆由自心。造惡並是心。作善即天堂
所、近惡即地獄所、収不離生死。大士発心、善惡俱断除、伏自心
入無上正觀。遺教經云。制心一処無事不辯。故名制心門。

言禪定解脱心門者、禪定能絶念。定即無思、心無思念。體性明淨、
離諸結縛、名為解脱。法華經云。禪定解脱等、不可思議法。故云
禪定解脱心門。

達摩禪師論一卷

四

以上P二〇三九号Vの四種の内、最初に書写された『天竹

国菩提達摩禪師論』一卷の本文を掲げたが、その形式は、最
初に「禪門の法は経論の所説の如く多義が有つて、直に一名
には非ず」と前置きし、別名として禪定門以下安心門に至る
一五門を列記し、次いで最後の安心門から順次逆に一門ずつ
最初の禪定門まで、その名称の由来を經典の引用を交えなが
ら説明するものである。

ところで本論には、『維摩經』の五回を最高に、『法華經』
『觀音經』を含む二回、以下『華嚴經』『無量壽觀經』『念仏
三昧經』『遺教經』各一回と經典の引用が一回あり、更に直
接の引用ではないが、最初の安心門の説明の最後に、「此出
唯識論」といって、『成唯識論』をその典拠として明記して
いることが注目される。従つて当然のことながら、この一本
は「天竹国菩提達摩禪師論」乃至は「達摩禪師論」というタイ
トルを有しながらも、前述の関口博士紹介になる橋本師所蔵
の『達摩禪師論』と同様に、達摩自身の説法を直接門人が記
録したというようなものではなく、後世達摩の系統をひく人
々の要請によつて生み出された数ある「達摩論」の一種であ
り、その成立も『成唯識論』が玄奘(六〇〇—六六四)によつ
て翻訳された六五九年以後であることは確実である。しかも
前述の如く最初に禪定門に始まり安心門に終る一五門を列記
しておいて、その説明は逆に安心門から始めて禪定門に終る
というようないわば逆形式のものは、京都大学の入矢義高教

授によれば、初唐に成立したものにみられ、盛唐に成立したものは再び六朝時代と同様、この逆形式をとらないといわれる。⁽¹²⁾そして入矢教授は、初唐成立の例として僧肇に仮託された『寶藏論』⁽¹³⁾を、盛唐成立の例として黄檗希運の『八五〇』の『傳心法要』⁽¹⁴⁾を挙げておられる。この例に従えば、本論は初唐の成立ということができるとはなからうか。

一方内容的特色としては、本論が禅門の一五の別名を説明する際に、一様に「常に心を看守するに由るが故に」という基本的立場を述べていることである。この「看守心」すなわち「看心」「守心」の立場は、既にみたように、橋本師所蔵の『達摩禅師論』も主張するところであるが、これはまさしく四祖道信、五祖弘忍の心要とするところであり、また『維摩経』の五回にわたる引用や『無量壽観経』『念仏三昧経』等の浄土系經典の引用がなされている点からも、これが「頓生浄土」を説く橋本師所蔵の『達摩禅師論』と同じく、東山法門と極めて密接な関係にあることが窺われるのである。すなわちこの二つの『達摩禅師論』は、四祖道信、五祖弘忍による東山法門の主張を祖述しようとする基本的立場を同じくするものであり、あるいは同一系統の人の手になるものではないかとさえ考えられるほどのものである。

五

この橋本師所蔵の『達摩禅師論』との基本的立場における密接な関係に加えて、P二〇三九号Vの『達摩禅師論』の説いている具体的内容は、同じく敦煌出土の『南天竹菩提達摩禅師観門』（以下『観門』）の第四問答で採り上げられた七種観門とも、その表現及び内容において極めて密接な関係にあることも注目すべきことである。

すなわち『観門』は、禅定〔内容〕、禅観、禅定〔訳語〕、禅法の四つのテーマについての問答からなり、その後大聲念仏十種功德を付したものであるが、今その第四の禅法についての問答をみると、

又問。何名禅法。

答曰。禅法從通有次第。初学时從始終合有七種観門。第一住心門。第二空心門。第三無相門。第四心解脱門。第五禅定門。第六真如門。第七智慧門。

と七門を挙げ、第一住心門より第七智慧門まで順次その名称の由来を述べ、最後に

則是修禅学道。故禅有七種観門。

と結論づけているのである。⁽¹⁵⁾

ところで『観門』の説く七門と『達摩禅師論』の挙げる一五門とを比較してみると、その名称の一致するのは、僅かに

住心門と禪定門に過ぎない。ところが、この名称の一致する住心門と禪定門の二門こそが、まさしく天台大師智顛の撰述とされる『證心論』と『觀門』との密接な關係を示す『證心論』の該当部分に欠けているということは、単なる偶然であろうか。

嘗て『觀門』における七種觀門の組織と、『證心論』の所説との類似点に注目された関口博士は、『證心論』の

知心空寂、即入空寂法門。知心無繫縛、即入解脫法門。知心無想、即入無想法門。覺心無心、即入真如法門。若能知心如是者、即入智慧法門。

という説示における空寂法門、解脫法門、無想法門、真如法門、智慧法門の五門が、『觀門』の説く七種觀門の第二空心門、第三心無相門、第四心解脫門、第六真如門、第七智慧門にいずれもそのまま該当するが、第一の住心門と第五の禪定門とに該当する住心法門、禪定法門の明文は見出せないことを述べられ、一方が他方に基いて作られたということは明らかにできないが、少くとも両者の法門には、極めて共通する点の多いこと、また『觀門』と『證心論』が同一卷子または同一冊子に書写傳承された因由も此辺に見るべきではないか、という推論をされているのである。

従つて『證心論』と共通する五門に、『達摩禪師論』と共通する二門を加えれば、直ちに『觀門』の説く七種觀門が揃

うわけであるが、今直ちにその成立の前後關係を明らかにすることはできないにしても、これ等三者の間には密接な關係があつたとみることも可能ではないか、と考えられる。

六

『觀門』における七門と名称の異なる『達摩禪師論』の他の一三門についても、内容的に検討してみるならば、その説示においてかなりの共通点がみられる。そこで両者に共通するものを選んで対比してみよう。

『達摩禪師觀門』

住心門者、謂、心散動、攀緣不住。專攝念住、更無起動。故名住心門。

空心門者、謂、看心轉進、覺

心空寂。無去無來、無有住處。

無所依心。故名空心門。

心無相門、謂、心澄淨。無有

相見。非青非黃、非赤非白、非

長非短、非大非小、非方非圓、

湛然不動。是名無相門。

『達摩禪師論』

又言住心門者、常看守心故。

心即不起無動、故心即安住。(經典略) 故言住心門。

言悟心門者、由久看心。不起

動、即自心體即与道合。心虛空

寂無尋為道。故言悟心門。

言覺心門者、由常看守心故。

即覺自心體性真如。无色无形、

非常非斷、非内非外、亦非中

間、離諸色相、不出不沒、不來

不去、不生不滅、非垢非淨、亦

非方圓大小長短、離有離無、畢

竟空寂。此是自家真如、本性清

心解脫門者、知心無繫無縛。
一切煩惱不來上心。故名心解脫門。

禪定門者、西域梵音、唐言淨慮。覺心寂淨。行時住時坐時臥時、盡寂淨、無有散亂。故名禪定。

真如門者、覺心無心、等同虛空。遍周法界、平等不二、無干無變。故名真如門。

智慧門者、識了一切、名之為智。契達空源、名之為慧。故言智慧門。亦名究竟道。亦名大乘無相禪觀門。

以上の対比で明らかになく、両者の主張するところは、その名称を異にする部分においても、多くの共通点を見出すことができる。しかも多くの「達摩論」の中にあつて、「南」天竺国菩提達摩禪師の呼称が一致するのは、この両者のみで、以下一方は「觀門」、他方は「論」が付けられ、S二六

淨心、不可得以言說分別顯示。

(經典略)故名覺心門。

言禪定解脫心門者、禪定能絶念。定即無思、心無思念。體性明淨、離諸結縛、名為解脫。(經典略)故云禪定解脫心門。

言定心門者、由常看守心故。於五欲境界、不為乱惑。由看心中不令乱故。(經典略)故言定心門。

言了心門者、由常看守心。了自己心、无障導虚通迅速。如體常住不動、畢竟寂滅即涅槃相。故云了心門。

言達心門者、由常看守心故。漸達自心本性清淨、不為一切煩惱之垢所染汚、猶如虚空。故云達心門。

六九号Vの『觀門』の如きは、「南天竺国」の「南」の一字を欠いている程である。

そこでもしこの『觀門』が、従来一般にいわれているように、五祖下の念仏禅系の所産であるとするならば、今問題の『達摩禪師論』も、あるいはそれと同じ系統のものか、と考えられるが、現在の処それを証拠だてるすべはない。ただいえることは、この新たな『天竺国菩提達摩禪師論』の出現によつて、東山法門の立場から禅門の法を論じたいいわゆる東山法門の綱要書に、新たな資料を加え得たということである。

尚最後に『觀門』のテキストについて一言すると、従来S二五八三号V、S二六六九号V、竜谷大学所蔵一二二『觀門大乘法論』本の三種が知られていたが、その後私は、S六九五八号にも、七種觀門の後に、五法三自性八識二無我の説明文を挿入し、大声念仏十種功德の第三以下を欠く一本のあることを紹介した⁽¹⁷⁾。以上はすべて漢文のものであるが、一方『觀門』のチベット音写本の存在については、古くは久野芳隆博士によつて、英国印度省所蔵燉煌出土西藏本中にチベット音写本の存在することが報告され、また近年藤枝博士によつて、パリ国民図書館所蔵のペリオ・ティベタン中のP一二二八号に、今一つのチベット音写本のあることが報告された⁽¹⁹⁾。こうして漢文四種、チベット音写文二種の存在が知られていたのであるが、今回の調査によつて、更に漢文に一異本

が発見された。これは既に久野博士の本文紹介⁽²⁾、及びその写真に基く宇井伯寿博士の本文紹介⁽²¹⁾がなされた『大乘五方便北宗』を含むP二〇五八号中に、『大唐進士白居易千碎金字圖』を挾んで、書字された「南天竹国菩提達摩禅師觀」と題する『觀門』の一異本である。しかしこれは、途中第四問の「又問。何名禅法。」という問までで未完のまま終り、続いて「亡優婆夷文」『嘆佛文』が続くものである。従ってこの觀門には、第四問の答である今問題の七種觀門、及びそれに続く大声念仏十種功德は存在しない。かくして今日『觀門』には、漢文五種、チベット音写文二種の存在が知られるに至ったのである。

- 1 関口真大『達摩大師の研究』序言一頁。
- 2 関口真大前掲書八一頁。
- 3 水野弘元「偽作の法句経について」『駒沢大学仏教学部研究紀要』一九三三頁参照。
- 4 中川孝「燉煌出土達摩禅師論に就いて」『印度学仏教学研究』八一―二六七頁。
- 5 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』八五頁注⑥。
- 6 一九七〇年パリ、ヒブリオテーク・ナンショナル発行の『敦煌漢文文献目録』I' ("Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang" I) 二八頁にはP二〇三九号の縦横を28.7à 29.3×1579.8cmと厳密な数字で表示してあるが、今は私自身の実測に依った。

菩提達摩に関する敦煌写本三種について(田 中)

- 7 上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」(上)『東方学報』京都三八一四七―一四八頁、同(下)『東方学報』京都三九一五六―一九二頁各参照。
- 8 上山大峻前掲論文(下)一五八―一五九頁の表五『瑜伽論』講義録一覽によると、卷三五―三八の欠はS六七八六号、卷四七―五三の欠はS六六七八号とP二二一〇号で補いうるようである。
- 9 拙稿「イギリス・フランス留学記」『駒沢大学仏教学部論集』三一―一六四頁参照。
- 10 私のパリ滞在中彼地の東洋学者から大正蔵経卷八五古逸部の新資料による改訂と補遺の出版を日本の学会で推進実現するよう強く要請された。
- 11 原写本では「亦名安心門」とあるが、安心門は別にあり、後の説明文では、これが正心門となっているので、「安」を「正」に訂正した。
- 12 入矢義高講述「六朝から唐代へ―中国文学史の移り変り―」(東洋文庫東洋学講座)(以下傍点筆者)
「夫神中有智、智中有通。通有五種、智有三種。(以下略)」「僧肇、寶蔵論」
「文殊當理、普賢當行。理者真空無礙之理、行者離相無盡之行。」(傳心法要)
- 13 『寶蔵論』の成立年代については、八世紀末から九世紀初頭という説がある。鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』二九三頁参照。

- 14 『傳心法要』の成立については、裴休(七九七—八七〇)が、大中十一年(八五七)一〇月八日に序を書いたことが、一つの目安とされている。入矢義高訳註『傳心法要・宛陵録』付、柳田聖山解説一七二頁参照。
- 15 鈴木大拙『禅思想史研究』第二、二二五—二二六頁参照。
- 16 関口真大前掲書二九八—二九九頁参照。尚関口博士は、二九九頁で「第三の禅定門」とされるが、この「三」は「五」の誤りである。
- 17 拙稿「『南天竺国菩提達摩禅師觀門』と『修行大乘最上法』(擬)―敦煌出土スタイン本六九五八号にみる禅・浄・密の交渉―」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』二三) 一二六—一四二頁参照。
- 18 久野芳隆「流動性に富む唐代の禅宗典籍」(『宗教研究』新一四—一) 一一九頁参照。
- 19 藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」(『東方学報』京都三一) 二六一頁参照。
- 20 久野芳隆前掲論文一二三—一二七頁。
- 21 字井伯寿『禅宗史研究』第八「北宗殘簡」七、四六八—五一〇頁。

第三章梁武帝撰とされる『第一祖達摩禅師』について

一

敦煌出土P二四六〇号は、五〇・五糵からなる第二紙と第五紙以外は、それぞれ長さのかなり異なる黄色の良質紙六紙からなり、縦二四・五糵、横二〇三・五糵⁽¹⁾で、首部が破損し、全体の約三分の二は表裏補修が施された写本である。表は野入り一行一七字の整然とした書体で、道教文献の『太上洞玄靈寶業報因縁経』が一一四行にわたって書写されており、裏も野入りながら二行の野に三行ずつ書かれ、最初は北宗の神秀撰とされる首部を欠いた『観心論』が、第一紙(表の第六紙に相当)から第六紙五行の九六行にわたって記されて完結し、その後一糵の余白に続いて、「第一祖達摩禅師、梁武帝撰」と題するものが五行にわたって記され、五行は第六紙がここで終ることもあって途中で未完のまま擱筆している。

『観心論』については、現在敦煌本七種、朝鮮本二種、金沢文庫本二種、少室六門本一種と、都合一二種の異本の存在が知られているが、このP二四六〇号Vは、現在の大正藏經の依用したS二五九五号に欠けている首部三問答の内、第二問答の途中から始まって、最後は完結するものである。

ところで裏の第六紙後半の六行目以下五行にわたって書写された『第一祖達摩禪師 梁武帝撰』とされるものは、敦煌文献に初出するものであるが、これが『寶林傳』(八〇一)巻八にのみその全文を掲げる梁の武帝による達磨の碑文とされるものの首部であることが、両者の比較によって明らかになった。この僅か五行の本文は、『寶林傳』に掲げられた碑文全体の約一〇分の一に過ぎないが、両者の該当部分を対比して、以下その全文を示してみよう。

二

『寶林傳』巻八⁽³⁾

於是武帝(中略)乃製此碑編為文曰。

我聞、滄海之内、有驪龍珠。白毫色中、現楞伽月。誰我大師得之矣。

大師、諱達磨、云天竺人也。莫知其所居、未詳其姓氏。以精靈為骨、陰陽為氣、性則天假、智乃神興。含海嶽之秀、抱陵雲之氣。類鄢陀身子之聰辯、〔後略〕

P二四六〇号V

第一祖達摩禪師

梁武帝撰

我聞、滄海之内、有驪龍珠。白毫色天、莫見人不。識我大師得之矣。

大師、諱達磨、云天竺人。莫知其所居、未詳其姓字。大師以精靈為骨、陰陽為器、性即天假、智乃神興。含海岳之辭、抱陵雲之志氣。類鄢陀身子之聰〔攔筆〕

以上の対比によって知られるように、敦煌本は、「第一祖達摩禪師 梁武帝撰」というタイトルがあつて以下本文に移るが、『寶林傳』本は特に標題はなく、撰者については、「是において武帝が、(中略)此の碑を製し、編して文を為して曰く。」というように、前文の中でこれを述べていること、また敦煌本では、「白毫色天、莫見人不。」というところを、『寶林傳』本では、「白毫色中、現楞伽月。」というように、達磨と「楞伽」との関係を意識したような表現がとられていることが注目される。尚、この表現は、『寶林傳』本の末尾にある頌の最初にも、達磨を金人になぞらえて、「楞伽山頂生寶月、中有金人披縷褐」とうたわれている如く、『寶林傳』本の強く主張するところのようである。それ以外は単なる誤写程度で、両者はほぼ一致するとみてよい。惜しむらくは、敦煌本が僅か五行で終わっていることであり、しかも現在のところ、敦煌本及びその他にこれ以外の異本の存在がまったく知られていないことである。

三

この『寶林傳』巻八に掲載された梁武帝によるとされる達磨の碑文は、花園刊本では五二二頁三行目より五三一頁二行目までに相当し、近年関口真大博士が、その著『達磨の研究』の第一章第二の四附録(シナ来朝後)に、『寶林傳』によってそ

の全文を鈔録する」として、『昭明太子の祭文』と共に『梁武帝の達磨の碑銘』と題して、その全文を示されている。

ところで関口博士の達磨の伝記の分析「四一 碑銘」によれば、この梁武帝が達磨の碑銘を製したことは、荷沢神会の『問答雜微義』に、隻履帰天のことを述べた後に、「梁武帝、造碑文。見在少林寺。」として始めて出て来る記事であり、それが神会の主張を多く継承する『歴代法寶記』(七七四)でも、同様に隻履帰天のことに続いて「簫梁武帝、造碑文。」と記されている。ところが朱陵沙門智矩集とされる『寶林傳』(八〇一)に至って、これが「於是武帝重聞、心加慰厚。本許製碑、心未承暇、再因此事(隻履帰天の事)筆者注、而敬虔虔、乃製此碑、編為文曰。」という前文に続いて、『碑銘』の全文が始めて登場する。しかもこの『碑銘』は、現存の文献中、最澄の『内證佛法相承血脈譜』(八一九)にその一部の引用があるのみで、全文を有するものは、この『寶林傳』が唯一のものである。

その後は最澄の『内證佛法相承血脈譜』に「梁武帝、製達磨碑。」圭峰宗密の『圓覺經大疏鈔』(八三八)に「梁武帝、製達磨大師碑文。」静・筠二師になる『祖堂集』(九五二)に「(隻履帰天の事)筆者注)因武帝、自製師碑文。」道原の『景德傳燈錄』(一〇〇四)に「初梁武、遇師因縁未契。乃聞化行魏邦、遂欲自製師碑、而未暇也。後聞宋雲事(隻履帰天の事)筆者注)

者注)乃成之。」そして契嵩の『傳法正宗記』(一〇六一)では『景德傳燈錄』の記事を承けて、「初梁武、與尊者遇、既機縁不合。尋聞其道、大頓於魏、遂欲碑之、尚未暇作。及聞宋雲之事、益加追慕、即成其文。」とされているのである。

以上梁武帝造とされる達磨の碑文が、嵩山少林寺に見在することが、荷沢神会によって主張されて以来、後続の諸資料にその記事が継承されてきた事実をみたのであるが、今一つ注目すべきは、そもそも達磨と梁武帝が相見したことを最初に述べたのも、著作こそ別であるが、同じく荷沢神会の『南宗定是非論』(七三二)であり、しかもこれが前掲とほぼ同一の後続資料によって承継されていることである。梁の武帝が達磨を迎請し、問答したことを述べないのは、前掲資料中僅かに『圓覺經大疏鈔』のみであり、逆に建碑のことは云わないが、相見問答のことを述べているのは、『六祖壇經』と贊寧の『宋高僧傳』(九八八)のみである。

このように、荷沢神会は、達磨と武帝との相見問答のことは『南宗定是非論』により、武帝による達磨碑銘のことは『問答雜微義』によって新たに主張したわけであるが、神会は、『南宗定是非論』において、

今普寂禪師在嵩山豎碑銘、立七祖堂、修法寶紀、排七代数、不見著能禪師。

といい、更に

秀和上在日指第六代伝法袞袞在韶州、口不自稱為第六代数。今普寂禪師自稱為第七代、妄堅秀和上為第六代、所以不許。⁽⁸⁾

と主張して、普寂が嵩山にあって碑銘を豎て、七祖堂を立て、妄に神秀を六代とし、自ら第七代と稱していたことを徹底的に批難攻撃したのであり、南北兩宗の対立も六祖自身ではなくて七祖の争いであったことが窺われるのであるが、⁽⁹⁾そうした神会の主張の背景には、既に古く嵩山において、梁武帝による偉大な達磨に対する建碑のあったことを主張することによって、達磨を顕彰しつつ、その偉大な達磨の正系七祖を称する直接のライバルである普寂の、同じ嵩山における建碑や七祖堂建立を妄計として退け、自らの達磨正系七祖を主張せんとする意図があったのではないかと考えられる。

いずれにせよ武帝による碑銘のあったことが、達磨以後二〇〇年もたった神会の著作に初出することは、たとえ『寶林傳』にその全文が掲げられ、敦煌本P二四六〇号Vにその首部約一〇分の一が存在したとしても、武帝自身になったものとは考えられず、関口博士もいわれる通り、⁽¹⁰⁾後世の偽作であろう。

1 第二章の注6にも示した如く、一九七〇年発行の『敦煌漢文文献目録』一、二八八頁には、P二四六〇号の縦横を23.5×24.9×204.5cmと表示してあるが、これも私自身の実測に依った。

2 拙稿「敦煌禪宗資料分類目録初稿」II 禅法・修道論〔1〕〔駒

菩提達磨に関する敦煌写本三種について（田 中）

沢大学仏教学部研究紀要』二九〕六頁参照。

3 『寶林傳』卷八 花園刊本五二二—五二三頁。

4 関口真大『達磨の研究』四〇—四一頁。

5 関口真大前掲書二一一—二二四頁参照。

6 関口真大前掲書一一三—一二三頁、達磨の伝記の分析

「一五 梁の武帝の迎請、一六 梁の武帝との問答」の項参照。

7 胡適「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」〔中央研究院歷史語言研究所集刊』二九〕八四七頁。

8 胡適前掲論文八四八頁。

9 拙稿「禅宗祖統説における七祖の問題」〔宗学研究』一四〕三六—四一頁参照。

10 関口真大前掲書四七頁参照。